

草刈りを終えた職場構内の地面を眺めると、小石があちこちに転がっているように見えました。しかし、よく観察すると、その多くは石ではありません。丸く半ば地中に埋もれた茶褐色の塊は、実は「ツチグリ」の幼菌です。周囲を見渡すと同じようなものが数十個も点在しており、一見何気ない地面の下で、キノコたちが一斉に成長の時を待っていることに驚かされます。草が刈られたことで初めてその存在に気づくことができ、普段は見逃してしまう自然の営みを改めて感じました。

ツチグリは担子菌類のツチグリ科に属するキノコで、学名は *Astraeus hygrometricus* です。和名は、成熟すると外皮が放射状に裂けて星のような姿になり、まるで地面から星が現れたように見えることに由来します。幼菌の段階では、この写真のように土色の球体で石ころと見分けがつきにくい姿をしています。成長すると外皮が五～十数枚ほどに裂けて星形に開き、中央に胞子を包んだ球体が現れます。胞子は頂部の小さな孔から放出され、雨粒や動物が触れる衝撃、さらには風などによって周囲へと散布されます。

ツチグリのもう一つの特徴は、外皮が湿度に応じて開閉する性質をもつことです。乾燥すると星形に大きく開き、湿ると再び閉じるため、胞子を効率よく飛散させる仕組みになっています。この動きは成熟後もしばらく繰り返され、乾燥した子実体は腐敗しにくいので、採集して教室へ持ち帰り、霧吹きや乾燥を利用した開閉の実験を簡単に行うことができます。形の変化が目に見えて分かりやすく、自然界の「湿度を利用したしくみ」を学べる教材としても大変優れており、足元に転がる石ころのような姿の中に、巧みな生存戦略が隠されていることを教えてくれるキノコです。

(2026 年 7 月上旬／文京区お茶の水女子大学構内)

